

山本覚馬・新島八重生誕の地碑 除幕式に臨んで

河野 仁 昭

会津盆地の春はおそい。建碑と除幕式の最終的な打ち合わせのため、四月下旬に会津を訪ねたときには、盆地を走るJR沿線は桜が満開だった。あれは遅咲きだったのか。

一九八九（平成元）年五月三十日の除幕式に訪れると、さすがにまぶしいような新緑で、山々の頂の残雪もほとんど消えていた。

できることなら、除幕式は覚馬か八重の誕生日にしたいと、密かに私は思っていた。覚馬は文政十一（一八二八）年一月十一日生まれ（明治二十五年十二月二十八日永眠）、八重は弘化二（一八四五）年十一月三日生まれ（昭和七年六月十四日永眠）である。覚馬の誕生日は真冬だから無理だな、と思いもした。

「五月がいいですよ」

最初の打ち合わせのとき、宮崎十三八さんは断定的にそういわれた、「冬の間は石材の仕事などできたものじゃないですから」。同席されていた五十嵐勇作さんも同じ意見であった。「それじゃ、八重の誕生日にしては？」とは言いだしかねた。建てること決まったら早いほうがいいに決まっている。

創立一一周年記念事業募金の用務でこの地を訪ねた木村健二理事長室長から、会津の校友が山本家墓地の管理の問題などで同志社に要望があるらしいのと、会津行きをうながされた私は、一九八七年九月初めに会津を訪ねた。校友の若月健悟若松教会牧師（当時）

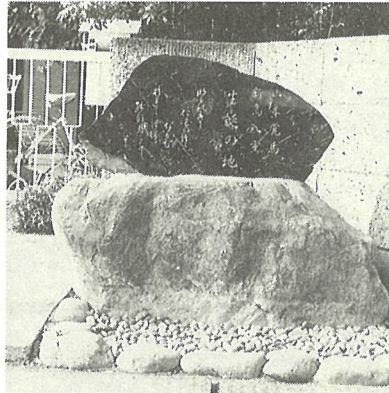
が出迎えて下さって、牧師の教会員である歴史家の五十嵐さんに紹介された。お二人が最初に私をご案内下さったのは、東山の大龍寺であった。ここに、あやうく無縁墓になるところを住職のはからいでまぬがれた山本家の墓がある。墓の所在は人に知られていない。

覚馬も八重も会津ではほとんど忘れられている、だから顕彰の意味を兼ねて、お寺の境内に八重の歌碑でも建てさせてもらってはどうか、というのが若月牧師のご意見であった。

ついで、山本家跡だという宮崎さんのお宅へ伴われた。宮崎さんは東京へ出掛けていて不在であったが、私のために歴史資料のコピーを奥さんに託して下さっていた。資料は五十嵐さんからもいただいていた。

一年後の一九八八年秋、全国各地の校友・同窓の集いに足まめに出席しておられる松山義則総長、田中久雄高等学校長（理事）らの案内役として、私はふたたび会津を訪う機会をえた。時間の間隙をぬつて、総長らと宮崎邸に山本家跡を見に立ち寄った。

「覚馬・八重を顕彰するために、同志社がもし生誕の地碑をお建てになられるなら、土地は提供させていただきます」



建立された生誕の地碑

宮崎さんは、そういわれた。大龍寺墓地へも行った。住職は花園大学のご出身だった。碑を建てるとすれば、鶴ヶ城にも、覚馬が教授をつとめた日新館跡にも近い宮崎邸のほうによさそうに思われた。大龍寺では碑の話はでなかった。

生誕の地碑を建てさせていたきたいという返事を、宮崎さんにしたのは、それから一カ月ほどのちだったろう。園部望庶務部長（当時）が、すごく乗り気であった。覚馬・八重を顕彰する機会は、過去にほとんどなくて、書面でその不満を訴えてくる校友さえもいた

のである。

「わたしが今いる会津若松市米代二丁目に住居を定めてから二十数年になるが、当時は田んぼを埋め立てて建てた自宅であったから、全く気づかないことであった。

それが郷土史を学ぶようになってから、幕末の古地図を見ると拙宅前の通りは昔の米代四ノ丁であり、会津藩士の住宅が並んでいた一隅だったのを知った。

さらに拙宅のある場所が、京都の同志社大学の生み親である山本覚馬やその妹の新島八重の生家跡であることがわかったのは、近年になってからである」（宮崎十三八「山本覚馬・八重の生誕碑」『福島民報』一九八九年四月二三日）

その古地図のコピーをいただいた（市販もされている）が、山本覚馬一五〇石と祿高まで記されている。覚馬の父権八（旧名・永岡繁之助―明治元年九月十七日戦没）は、佐久（明治十一年から十六年まで同志社女学校の舎監をつとめる）の婿養子になった人で、永岡家は山本家から道をへだてて四軒斜向かいにあり、やはり一五〇石となっている。佐久とは幼馴染みだったのだろう。

明治二十年の夏、新島夫妻は福士成豊の好意で札幌に避暑した。八重はそのとき、北海道庁の内藤兼備の妻ユキに再会している。ユキの旧姓は日向で、生家は山本家の背中あわせ、年齢は八重とほぼ同じだ。ユキの父日向左衛門は四〇〇石取りであったことも古地図にある。町奉行だった左衛門は会津戦争で重傷を負い、竹藪へ入って割腹自殺した（『北海道新聞』一九八七年四月一五夕刊）。会津若松には、いまだに会津戦争の血腥さが残っているように思うのは、私が旅人のせいかもしれない。

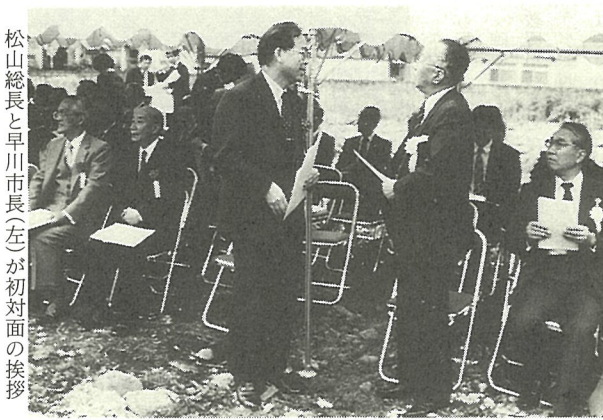
内藤夫妻にあてた新島襄・八重連名の、りんごを送られた礼状が残っているから、札幌での再会後、両夫妻は交際をもっていたらしい。

宮崎さんは総長に約束されたとおり、門脇のブロック塀を約一メートルほど屋敷の内側へ引っ込めて、一坪ほどの建碑用地をととのえて下さった。石屋（石万建設工業株式会社）さんとの折衝、工事の監督にいたるまでも引き受けて下さったのである。それだけではない、屋敷を増築してお嬢さん夫妻と同居されることになり、「これで向う五十年は責任をもつて

碑の管理をやらせていただけます」と、除幕式の日、にこやかに言われた。屋敷は増築工事中であった。

生誕地碑は、同志社と宮崎家との共同事業になるものだ、といわねばなるまい。

碑は台石をふくめて、高さ一・二メートル、幅一



松山総長と早川市長（左）が初対面の挨拶

だ。茶色っぽい台石に立てた黒緑色の蛇紋岩には、「山本覚馬／新島八重／生誕の地」と刻み、その左側に、「明日の夜は何国の誰かながむらん／なれし御城に残す月かげ」と、八重の自筆の和歌が刻まれ、歌碑を兼ねるものになっている。会津開城のとき八重が城の壁に書き残したというこの和歌は、彼女が晩年に揮毫した軸が新島先生遺品庫に収蔵されているので、それを写したのである。

碑陰は松山総長の選文になる覚馬・八重の経歴と、右の和歌の現代表記で埋められている。

除幕式は午前十時からで、私たちは定刻三十分前にホテルのマイクロバスで赴いた。すでに報道陣と数十名の市民が集まっていた。宮崎邸の前の空地には大きいテントが張られ、宮崎さんが会長をなさっている会津史学会の人たちが、受け付けや連絡などにたち働いて下さっていた。式次第は次のようであった。

讃美歌 九〇 司 庶務部長 大原正次
聖書朗読ならびに祈禱 理事 会衆一同
建立経過報告 財務部長 田中久雄
式辞 総長 橘 愛治
松山義則

除幕

理事長 松山義則

会津若松市長 早川廣中殿

宮崎十三八殿

祝辞

会津若松市長 早川廣中殿

福島県立短期大学長 高瀬喜佐衛門殿

会津史談会長 中川幸意殿

挨拶

女子大学長 石田 章

宮崎十三八殿

頌栄 五四一 会衆一同

祝辞 理事 田中久雄

宮崎さんは挨拶の中で、少なくとも今後五十年は宮崎家が碑の管理の責任をもつとのべられたあと、今日の除幕を記念して、毎年五月三十日に碑の前で記念の集いを持ちたいと、参加を呼びかけられた。除幕式の出席者は、右のプログラムに名前があげられている方々をふくめて約一二〇名。その大多数が、事前に新聞に掲げられた建碑経過の記事で除幕式を知っての参加で、報道関係者の熱心さといひ、この街の人たちの郷土史への関心の高さがうかがえる。宮崎さんが史学会の会長でもあるだけに、碑前での記念の集いはかならず行われるにちがいないまい。

「今日は会津の空に讃美歌がながれて感激

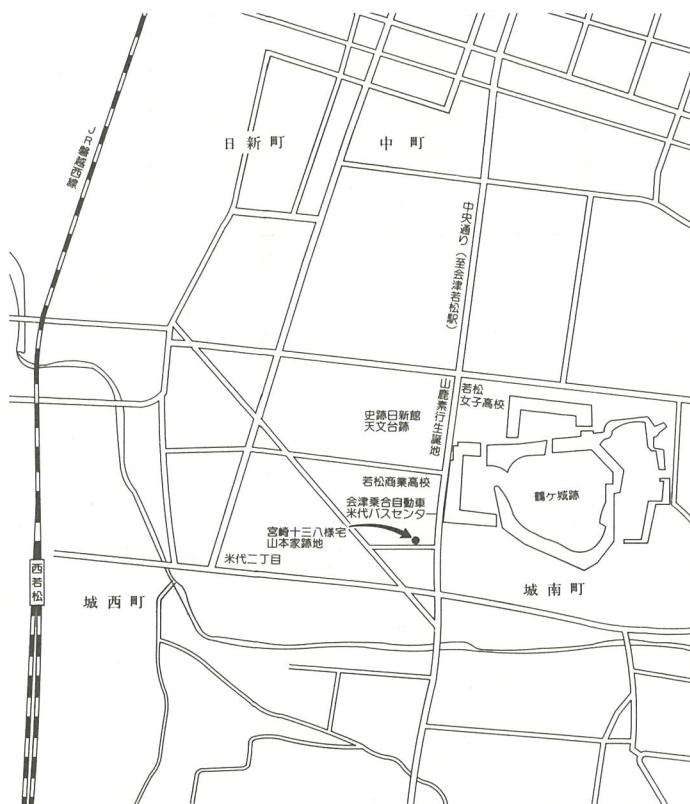
です。こんなことは滅多にありません」

クリスマスチャンである五十嵐さんは、式のあとしみじみそういわれた。五月にできてよかった、と私は思った。建碑にかかわってきたおかげで、冬の寒さが厳しく長いだけに、会津に限らず東北の人たちにとって、五月の季節感特別のものらしいことが納得できるようになっていたのである。

覚馬・八重の生誕地碑がある会津若松市米代二丁目一番二十三号宮崎十三八氏宅へは、会津若松駅前から市内循環バスでも二十分たらずの距離だが、タクシーなら十分とはかからない。鶴ヶ城のほりにある米代バスセンターのすぐ裏手である。

覚馬が藩主松平容保に従って上洛したのは元治元年二月、その覚馬を頼って母佐久、妹八重、長女峰が上洛したのは、明治四年十月であった。当時の要路は猪猫代湖から山越えて白河へ抜けていた。京都まで何日を要したのだろう。いまは六時間たらずである。通いなれ親しい人でもできたせいか、私には遠い気がしない。

(本部社史資料室長)



会津若松市米代2丁目1-22宮崎邸
「生誕の地」碑略地図

同志社と心理学

同志社大学心理学研究室六十年史

わが国に西洋の心理学が紹介されたのは明治の初頭でありました。一八七〇（明治三年、西周はその講義録のなかで「性理学」という訳語を用い、また、一八七五（明治八年に彼がはじめて翻訳した、J・ヘヴンの著書は「心理学」と題して文部省から刊行され

松山義則

ました。この書にはいまも用いられている意識、注意、知覚、想像、抽象などの術語があらわれています。西周は、京都、四条大宮の更雀寺に私塾を開いていましたが、塾生退塾問題がおこったときに、勝海舟の紹介で山本覚馬はその周旋にあたるなど昵懇でありました。また、広く世界に読まれました心理学の著者、J・ヘヴンはアームスト大学教授であり信仰ふかい人物でありました。このように、同志社と心理学研究と教育とは当初から関係があったと言えます。

西周によってヘヴンの書が刊行された年に、同志社は開校されましたが、ディヴィスの書生であった元良（杉田）勇次郎は神戸か

ら彼に同行し、最初の八名の生徒の一人であったと言われています。元良勇次郎は一八八八（明治二十二年、東京帝国大学の、精神物理学講師、一八九〇（明治二十三年、心理学教授となり、わが国の心理学研究と教育の師祖となりました。元良について本間重慶は「元良勇次郎氏が同志社第一番先きの学生となり、次に神戸から横山氏と私の二人が上京し、此神戸から出た三人が同志社創立の基礎を作ったのである。」と述べています。また、元良と同志社時代に同室であった徳富猪一郎は「記者は青年の頃、博士と同志社にあり、且つ或時には同室でありたるがために、当時の博士に就ては、頗る知る所あり。当時博士は、既に一個の老成人にして、其の非常なる勉強家たりしは、全校第一なりき。記者と同室の折には、概して午前三時頃より燈を点じて勉強したり。乃ち土曜日と雖も、殆んど其の光陰を空過したることあらざりしが如し。然も、曠夷、安詳、毫も周囲の事に拘泥せず、是を以て或は奇人と認むる者あり、或は修謹の君と称する者あり。されど、其の胸中燃るが如き、大有為心と、其の非常なる抱負とに到りては何人も氣附かざりき。」と記していま

す。同級であった中島力造はつぎのように述べています。「新島先生は代数を教えられたが、その時の生徒は元良君と上野栄三郎と余との三人であった。私は福知山の生まれであつて、神戸に出るときには何時も三田に一泊する習いであつたから、土地の噂などが縁となつて、よく話が合つて、その頃から懇意につき合つて居つた。相国寺の方に校舎が移つてからは、生徒もふえ、地質学なども習つた。まだ級が揃はぬため、ヘヴンの心理学課業などは私が一年先きに聴き、元良君が一年後に習われた。学科以外で氏が一番愛読されたのはスマイルの『自助論』とカーペンターの『精神生理学』であつた」。元良がヘヴンの心理学やカーペンターの精神生理学を読んでいたこと、また、J・T・ギューリックの生物学的進化論を学んでいたことなどは、彼がその後、心理学者となる素地を同志社時代につちかつていたと考えられます。東京帝国大学ではじめて講座制を採用されたのは明治二十六年であり、心理学・倫理学・論理学第一講座の担当教授は元良勇次郎であり、その第二講座の担当教授は先述した中島力造であります。元良は三年半同志社に在学しましたが、京都

第一公会の会員として美濃、和歌山に伝道のときをすごしています。のち、元良は新島先生と親交の深かつた津田仙の創設した学農社の教師となり、彼のすすめで青山学院での教育、経営そして説教をも担当しています。

松本亦太郎は一八八二（明治一五）年、高崎から来て同志社に学びました。新島先生が牧師をつとめていた京都第二公会で受洗し、ゴルドンからヘヴンの心理学を学んでいます。しかし明治一七年に、私学は徴兵猶予の特典を受けられず、京都府立中学校に転校しましたが、そのときの様子について、「先生は、私の一家の事情を尋ねられ、遂にあなたの場合を主として考ふれば府立中学校に転ずる方が可いと言われた。先生が単に校長としての立場から考へずに、私の如き低学年の二学生 of 立場により熟考され、私の取る可き方針を指示された事を私は深く徳として今も尚有り難く感じてゐる。」と述べています。その後、東京にうつり、海老名弾正の本郷講義所で活躍し、同志社での友人であつた大西祝の紹介で元良勇次郎に会っています。東京帝国大学にすすんでからは元良のもとで心理学を学ぶこととなりました。一九〇六（明治三九）年、

京都帝国大学に文科大学が設置されましたが、その心理学講座の初代教授として着任し、のち、一九一三（大正二）年、元良のあとを受けて東京帝国大学の第二代心理学講座の教授として後進の指導にあたりました。京都在住中、松本は同志社の女子教育に貢献するところ大でありました。同志社女子大学設立準備委員長、同志社理事として原田助総長をたすけています。

わが国の大学に心理学が講座なり専攻を設置されたのは東京帝国大学が元良勇次郎を教授にむかえたのを嚆矢とします。つづいて先述しましたように、京都帝国大学が松本亦太郎を教授として講座を開きました。大正時代に入つて一九二二（大正一一）年に東北帝国大学、一九二五（大正一四）年に九州帝国大学、一九二六（大正一五）年に京城帝国大学さらに一九二八（昭和三）年に台北帝国大学、一九二九（昭和四）年に東京と広島文理科大学に設置されました。私立大学では一九二〇（大正九）年に慶應義塾大学が心理学専攻を設置し、立教大学が一九二二（大正一一）年に、日本大学が一九二四（大正一三）年に、一九二七（昭和二）年に同志社大学と法政大

学、一九三三（昭和八）年に早稲田大学に、一九三四（昭和九）年に関西学院大学にそれぞれ心理学専攻が設置されました。戦前、旧制大学で心理学の専攻課程をもっていたのは一五大学でありました。日本に心理学学会が発足したのは、同志社大学に心理学専攻が設置された年と同じ一九二七年であり、松本亦太郎先生を会長として東京大学で開催され、二日間にわたって六六の講演、一九〇名の出席であったと記録されています。第二回大会は一九二九年に京都大学で行われ、同志社大学の本宮弥兵衛教授が大会座長をつとめています。

同志社大学心理学専攻は文学部のなかにすでにありました、神学科と英文科に加えて哲学科が増設されましたとき、哲学専攻、倫理学及教育学専攻とならんで設置認可を受けています。草創期の教授は和田琳熊先生（一八七〇—一九四四）と本宮弥兵衛先生（一八六八—一九五七）でありました。和田先生は山口県出身、山口中学校生徒のときに受洗され、のち東京帝国大学に学ばれ、中島力造先生の推薦を受けて同志社教授に就任されました。哲学、倫理学、心理学などの科目を担当

当されていきました。その後、コロンビア大学、ベルリン大学で心理学を研究され、心理学史、発生心理学、英書講読（ジェームズの意識の流れ）などを教えられました。先生はスタンレー・ホルルの「一心理学者の見たる基督」の翻訳を完了されましたが、関東大震災に会い、原稿、印刷物、紙型そして印刷工の生命をもうばわれました。ホルルはこれに対して温かい同情の手紙をよせています。その翌年ホルルは他界しましたが、先生は再度完訳を一九二九（昭和四）年に完成しましたがその売行きは見込みえず、その後十年を経て大要を紹介する形をとって、一九四〇（昭和一五）年に刊行されました。先生がなくなる四年前でありました。本宮先生は宮城県のご出身ではじめ慈恵会に医学を学んでおられましたが信仰を得て、同志社神学校に学び、のち、オベリンとイエール大学で神学と心理学とを修められました。一九三一（昭和六）年、東大で開催されました学会では「リズム意識の運動に及ぼす影響」と題する実験心理学的研究を発表され、すすんで感情の生理心理学的研究から晩年には理論心理学に意欲をもやされました。先生は日本心理学会で委員、評議員

として、現在の学会理事の役割を果たされ寄与されるころ大であったと思います。関西では、京都大学と関西学院と同志社にだけ心理学専攻があっただけです。松本亦太郎先生、今田恵先生とともに当時の学会を背負われました。第二次世界大戦の末期、心理学専攻は一時閉鎖されましたが、一九四八（昭和二三）年再開し現在に至っています。

専攻が設置されてから六十年を経過した機会に、同志社大学心理学研究室六十年史が過日刊行されました。戦前から心理学専攻をもつ諸大学がその歴史を公刊していますので、わが国の心理学史の充実に一助となることとあります。ことにこの書におさめられている、竹中正夫神学部教授と率阪良二愛知学院大学教授による、元良、松本両先生についてのご執筆はまことに示唆ぶかいものであると思います。

（総長）

女子大学学芸学部日本語日本 文学科の新発足にあたつて

(その一)

藤 本 徳 明

一九八九年(平成元年)四月、同志社女子大学学芸学部日本語日本文学科が正式に新発足した。同志社の伝統と、多くの関係者のご尽力と、そして何よりも、多数の入学生諸姉からの熱い期待とに支えられて、新学科は、幸先よい出発を飾ることができたのであった。

同志社女子大学学芸学部には、従来、英文学科と音楽学科があつたが、日本文学科あるいは、国文学科はなかつた。これは、縁あつて、本学に赴任した時の私にとっては、何やら不思議なことであつた。キリスト教精神に基づく建学の事情からいって、英文学科と音楽学科との存在はきわめて当然のことであ

らう。しかし、多くの大学では、文学部においては、たいていは車の両輪のように存在する英文学科と日本文学科あるいは国文学科の、一方が、本学では欠けていることは、日本の、しかも京都の、それも一世紀の古い歴史を誇る同志社女子大学であるだけに、いくらか奇異なもののように、日本文学を専門とする私には感じられたのも、自然な反応であつたと思われる。

そのような認識は、すでに大学内部でも共通のものとして、定着しつつあつたらしいのである。当初は、別の形での日本文学の新学科の設立が、計画されていたようだが、種々の経緯の後、日本語日本文科という方向で

新学科設立が決定されたのは、一九八七年夏のことであつた。私事にわたつて申し訳ないが、それは私が赴任して間もないときであり、新学科設立の拠点たるべき短期大学部日本語日本文学科には、当時は短期大学部設立の功労者にして、先輩にもあたる中皓先生(現在同志社女子大学名誉教授)、佐治圭三先生(現在大阪大学教授)の両教授がおられた。で、学芸学部新学科設立の責任者になられる方が、あるとすれば、おふたりのいずれかであろう、と私はひとごとのように事態を見守っていたことを告白しなければならぬ。ところが、おふたりとも、一九八八年春には、同志社女子大学にはご在任でないことが明らかとなった。そして、あるうことか、率直に言つて同志社女子大学の事情をほとんど知らないうちに等しい(知つていれば、指示をたぶん拒みつつけたであろうが、新任教授であるところの私に、設立事務の推進役になるようにと指示されたときの驚きたるや、言い古された言葉だが、まさに「青天の霹靂」だつたと言つてよい。当然、固辞しつづけたが、諸般の事情により、受諾することを余儀なくされて以来、本稿執筆時点の一九八九年夏休みまで

は、心身共に、苦闘に継ぐ苦闘、まさしく超長期の陣痛に譬えることもできよう、ながいながい二年間であった。

同志社の建学の精神に則って、新しい日本語日本文学科は、国際性を取り入れたユニークな学科としたいという方針が打ち出され、その方針に即して、文学、語学各方面のスタッフは、実力において、及ぶ限り優秀な顔ぶれを揃ええたものと自負している。国際性を支えるものとして、他大学には数少ない、日本語教授法のカリキュラムなどをもその特色として示せたと思っているが、しかし、国際的に、発信機能を備える学科にするということとは、コミュニケーションの技術のみ、錬磨するだけでは、不十分なのであって、伝達されるべきコミュニケーションの内容としての、日本文学や日本語、そして日本文化に関する素養をも、しっかりと習得し、日本人としてのゆたかな知性や感性をも、ここで学ぶ学生たちには身につけて貰わなくてはならないのである。それは、英語名でリベラル・アーツを標榜しているわが同志社女子大学の新学科としては、当然の心構えであるはずであり、両面に亘る充実した教育、研究は今後の

学科発展の大きな目標となるものであろう。

長年の同志社の伝統への信頼感、新学科への清新な期待、そうした要素が相乗効果をもたらしたためか、新学科への志願者は定員の十一倍を超え、定着率の驚異的な高さ（ほぼ京都大、大阪大レベルの定着率であった。）とも相まって、定員の倍近い新入学生を迎え得たこと、そのための学年始めにおける東奔西走なども、定数確保に苦心しているいくつかの大学のことを思えば、ある意味では、贅沢な悩みだったというべきことも知れない。

赴任後日の浅い教授であるところの私に、大変な信頼を寄せて頂いて、設立の作業を任せて頂き、新学科設立事業の采配を揮って下さった石田章学長先生をはじめとして、煩雑なさまざまな実務に快くご協力下さった日本語日本文学科の先輩や同僚諸氏、また、ここに一々挙げきれない多数の同志社女子大学の関係教職員の方々からお寄せ頂いた一方ならぬご好意とご協力に対しては、心から深く感謝申し上げます。なお、新学科の恵まれた出発は、姉妹学科である短期大学部日本文語日本文学科の成功した実績なしには考えられないことであった。短期大学部日本文語

日本文学科は、発足二、三年にして、日本文学・

国文学系統の短期大学では、受験生の質への社会的評価は全国のトップクラスに位置づけられ、卒業生の大多数は、有数の大企業や成長企業へ採用されつつある。（短期大学部英米語科についても事情は同様である。）同じキャンパスに立地する、姉妹学科のこうした成功例を目撃することがなくては、慎重な中央の行政当局が、設立決断から、わずか一年半余で、ひとつの学科の立案・認可・新発足を認めるという、異例の早さの、好意的な措置をとって頂けたとは考えられないのである。そうした中央との交渉などに際しての同志社総長松山義則先生よりのなみなみならぬご好意に対しても、厚い感謝の念をささげるものである。

今春うぶ声をあげたばかりの、同志社女子大学学芸学部日本文語日本文学科の、いよいよの成長発展を念じつつ、小文を草して、設立の経緯のご報告と、関係各位への感謝の言葉に代えさせて頂く次第である。

（女子大学教授・学科主任）

(その二)

安 森 敏 隆

世界の中の日本語・日本文学というところ
とにグローバルな視座を根底にすえて開設された学芸学部日本語日本文学科は、全国から多数の応募があり、本年四月より定員の倍近い学生とともに出発することが出来た。当初三クラスで出発する予定を急拠四クラスに変更し、また「日本文学基礎演習」の先生方一人一人にあたっていたく基礎ゼミのクラスも六クラスから八クラスにふやして、当初考えていたようにきめこまかい教育が出来るように配慮した。

四月六日(木)の入学式を終え、早速四月十五日(土)十六日(日)の両日をつかって、宇治の花屋敷で一泊二日の新入生のためのオリエンテーションをもたせていただいた。これは、当然のことながら学芸学部日本語日本文学科には先輩がおらず、四年間の指標をはやくもつてもらうために、短期大学の日本語日本文学科の二年生八名と学芸学部音楽学

科の先輩二名にオリエンテーション・リーダーになってもらい、それに学生部と学科の先生職員の方々に御足労を願ったものである。そこで、四年間のこれからのカリキュラム、学科の特徴、学生生活、クラブ等々について示唆し話し合ったのである。

本学科は従来の「国文学科」「日本文学科」と少しことなり、「日本語学」と「日本文学」の両者をアマルガムさせたところに大きな特徴がある。従って、一次、二次には教養科目を中心に、「日本文学」と「日本語学」の基礎ゼミを全員受けてもらうことによって足場をかため、三次、四次になるとその基礎力をもとに、(一)外国人に日本語を専門に教える日本語教授法を中心に置く課程、と(二)日本の「現代語」「古典語」を中心に学ぶ日本語課程、と(三)日本の古代・中世・近世・近代・現代の文学を中心に学ぶ日本文学課程、のおおよそ三つの方向にむかってひらかれ、これからの世界の動きにあわせて自由にどこからでも対応できるような国際人をつくるべく配慮されている。

オリエンテーション二日目の朝、せっかく学芸学部日本語日本文学科にはいったのだから

ら俄万智の『サラダ記念日』にちなんで全員一首ずつ短歌を作ってもらうことにした。これも驚いたことに全員、三十分ばかりでざらりと五七五七七の短歌をつくり短冊に書いたものである。印象に残ったものを二首ばかり紹介させていただくと、

・ 同志らのつどう社(やしろ)に女の子わたしも大いに学んでやろう

・ 「どうだい」と話しかければ「どうじょ」

だと答える人のいるあたたかさ

最初の一首は、「同志社女子大学」の漢字七字を三十一音のなかに読みこんだ才気煥発の一首である。二首目は俄万智の「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ」を念頭においたヴァリエーションであり、さらに「どうだい」(同志社大学)と「どうじょ」(同志社女子大学)がよみこまれ、みごとなパロディになっている。

ともあれ、オリエンテーションも無事終わり、新学期の授業も意欲的にとりくみ、七月の前期試験終了時までには一名の退学者も出さず、四年間の構想を胸にあたたためて各自それぞれ夏休みへとはいっていったのである。

(女子大学教授・教務主任)

元素の周期律発見者メンデレーフの 自署入り写真と中瀬古六郎

末光 力作

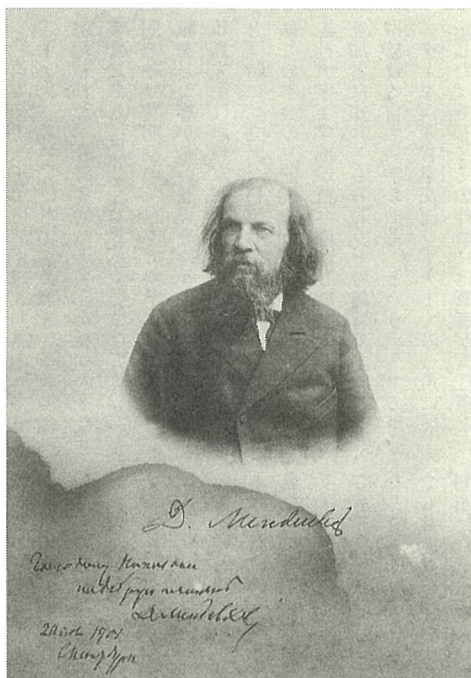
今年の四月一日から四日まで同志社大学田辺キャンパスで、日本化学会第五八春季年会が行われた。登録者約八千名、かなり大きな学会である。世間では案外知られていないが、同志社は黎明期の「日本の科学」に大きな貢献をした輝かしい歴史を持っている。第一、新島先生は思想家、教育者、伝道者であったと同時に、立派な科学者でもあった。同志社はこの学会の主催校でもあるし、この際、同志社大学工学部が持つ輝かしい歴史的背景を参加者に知ってもらおうとの趣旨で、「同志社に於ける自然科学の沿革」というテーマのポスターを「産官学交流コーナー」の一角に展示した。そしてその作成には筆者が責任者と

なった次第である。自画自賛でまことに申し訳ないが、このポスターは所期の目的を充分達したものと筆者は考えている。ポスターにはハリス理化学校、同志社病院、それに新島襄、ジョナサン・エヌ・ハリス (Jonathan N. Harris)、下村孝太郎、加藤与五郎、中瀬古六郎といった諸先輩の写真、新島襄のアーモスト大学時代の化学ノート、それにロシアの有名な化学者で元素の周期律の発見者、ドミトリ・イワノウィッチ・メンデレーフ (Dmitri Iwanowitsch Mendeleeff) の自署入りの写真などで、それぞれ若干の解説を加えた。なかでも参加者がひとときわ注目したのが、ここでも問題にしているメンデレーフの写真であっ

た。

自然科学に係わる者である限り、この写真に関心を払うのはむしろ当然であろう。まして化学者であれば尚更のことである。メンデレーフの元素周期律表といえ、誰もが中・高等学校時代、化学の講義で習った覚えがある筈である。読者の中には周期律表中の元素を原子番号順に「水兵のリーベばくの船なあ……(H、He、Li、Be、B、C、N、O、F、Ne、Na……)」とか、零族の不活性気体の順を「変な姉さんや夜暗やみでキスを乱発」(He、Ne、Ar、Kr、Xe、Rn)とか唱えて記憶した懐かしい思い出をお持ちの方もあらうと思う。当時セント・ペテルスブルグ大学の教授であったメンデレーフは、存在する諸元素についてつぎのように考えた。即ち、自然界には性質の異なった諸元素が漫然と存在しているのではなくて、原子量の順に並べると周期的に性質の似かよった元素が互にグループを作り、互に関係を保ちながら調和している。メンデレーフは当時発見されていた六三個の元素を用いて元素の周期律表を作成した。一八六九年のことである。そして論文は二年後の一八七一年、ドイツの化学雑誌に掲載されて

る。(Ann. 8, 133 (1871)) 元素の周期律表は元素の戸籍原簿であり分類表でもある。メンデレーフは自作のこの表を用いて十個ほどの未知元素の存在とそれら元素の物理化学的性質を予言した。そして、つぎつぎと彼が予言した通りの性質を持った諸元素が発見されていったのであるから、彼の得意な心の中が察せられる。一八八九年、英国の化学会から招かれ、ファラデー記念講演会で彼はつぎのように語った。



二十年前私は元素の周期律を発見し、これに基づいて三つの元素の存在と性質を予言し、将来これらの性質を備えた元素が発見されると述べた。それがガリウム (Ga) 一八七五年)、スカンチウム (Sc) 一八七九年)、ゲルマニウム (Ge) 一八八六年) として発見された。まさか私の生きている中にこのように周期律の正しさが証明されるとは露思つてもいなかった。まことに感無量なるものがある。

Д. Менделѣев
Человеку Накасэко
На добрый память
Д. Менделѣев
20 июня 1901.
С. Петербург

D. Менделѣев
中瀬古さんへ
良き思い出に
D. Менделѣев
20 6 1901.
セント・ペテルスブルグ

とこのような感懐を語っている。

元素の周期律の偉大さに関してメンデレーフ自身、興味深い言葉を残しているので紹介しよう。彼は哲学者カントの有名な言葉を引用して、「カントは自分自身、常に畏敬の念を以て見ているものとして、夜空に輝く星と心の中なる道德律をあげたが、私は更に一つを加えたい。それは宇宙万物を貫ぬいて存在する周期律である。」とこのように述べている。彼の人柄を垣間見る思いがする。

さて、どういう経路をたどって自署入りのメンデレーフの写真が同志社に伝わっているのでしょうか。写真に書かれているロシア語の訳を掲げておいたが、この写真は一九〇一年(明治三四年)年、六月二十日セントペテルブルグ(今のレーニングラード)のメンデレーフから中瀬古に宛て「良き思い出」のために贈られたのがわかる。そしてこの人こそ前述の中瀬古六郎博士なのである。博士について筆者はかつて本誌七三号「同志社人物誌」の欄に書いておいたので詳しくはそれを参照して頂きたいが、博士はハリス理化学学校を皮切りに、普通学校、女学校などで教鞭を取り、長く同志社にあつて研究・教育に貢献された方



である。また今日の工学部の前身、同志社工業専門学校の設立にあたって、「生みの親」としての役割をはたされた方である。博士はアメリカのジョンスホプキンス大学に学んだが、日本への帰路、ヨーロッパ諸国の大学を歴訪して研究、教育状況を視察した。そのとき、わざわざロシアのセント・ペテルスブルグまで足を延ばしてメンデレーフの会っているのである。メンデレーフは一八九〇年、大学教授をやめており、中瀬古博士が訪問したとき、彼は政府の度量衡局総裁の任についており、工業税制、鉄鉱区の調査、火薬、燃料などの諸問題を扱う行政官をしていた。メンデレーフは性格が単純、無邪気で人なつこい

野人といった人であつたと伝えられているから、日本からわざわざ訪ねてきた化学者、中瀬古を心よく迎えて呉れたものと察せられる。写真に記された「良き思い出に」の言葉がその辺の消息を伝えているように思う。中瀬古博士の専門は分析化学であるが、同時に化学史家としても有名である。わざわざ機会を作つてメンデレーフに会いに行つたあたり、その辺の片鱗が伺える。当時は今のようには航空路が発達しているわけでもなし、鉄道でセント・ペテルスブルグを訪ねるのはかなり大変だつたらうと推察される。博士は恐らくメンデレーフに会つた数少ない日本人の人であつたに違いない。

メンデレーフの自署入り写真など、日本中鐘や太鼓で捜しても見つかるものではない。まことに貴重な写真である。それが同志社に保管されているのは、同志社に於ける自然科学の歴史と伝統の重みを示すものである。写真であるから退色の恐れもあり、今後充分注意して管理せねばなるまい。また同志社学園傘下の中・高等学校の化学の講義で元素の周期律を教える場合、ここに掲げた写真を示して、私達の先輩、中瀬古

六郎博士のエピソードも一緒に加えて頂くと、生徒に深い印象を与えるのではあるまいか。この機会に関係の諸先生にお願いしておこう。

同志社は古い歴史を持つていただけに、このような貴重な写真も存在するし、これ以外にもハリス理化学校当時の物理や化学の器械、顕微鏡、書籍などが、中・高等学校に散在している。それらは百年を経過した今となつては歴史的にかなり価値が高いものである。このような物を一堂に集めて、アメリカのワシントンにあるスミソニアン博物館張りの同志社自然科学博物館を計画しては如何であらうか。現に岩倉の同志社高校には貴重な動物の標本の加藤コレクションがある。この保管も共に考えて見る時期が来ていると思うのである。

最後に写真のロシア語の解説には本学の河野収教授（ドイツ語、亀山郁夫助教授（ロシア語）に大変お世話になった。記して謝意を表したい。

（天学工学部教授）

海外で活躍した同志社人について

——移民社会と日本人キリスト教会 研究を通して——

飯田 耕二郎

去る六月三〇日、筆者は同志社大学人文科学研究所の公開講演会において、「ハワイ日本人」とともに「ある同志社人の軌跡」と題する発表を行なった。この講演会は、研究所の研究成果の一部がこのほどまとまり、『移民社会とキリスト教（仮題）』（PMC出版）として近日出版されるのを機にもたれたものであるが、そこで、同志社出身者で海外で活躍した人物の一例として、一八九三年にハワイに渡った伝道師・神田重英とすえ夫人および夫人の姉にあたる谷村かつ（同志社病院に附属する京都看護婦学校卒業生）の生涯と足跡を紹介した。

明治時代、現在よりもつと理想と熱意を持つて、キリスト教をひろめ、社会事業を推進しようとした同志社人がいた。同志社の名を高めたのは、いうまでもなく創立者新島襄によるところが大きかったが、新島先生に続く、明治期の熱意をもった同志社出身者にも負うところが大きかったように思われる。例えば、海老名弾正や小崎弘道、宮川経輝などは日本国内で活躍し、その名を高めた。また原田助や牧野虎次などは、海外でも活躍し同志社総長（社長）にもなつて、海外で活躍した同志社人としてその名が残されている。しかし彼ら以外に第三のタイプとして、主として明治

時代、海外に渡航して海外で活躍したが、その後同志社とはほとんどかわりなく過したため、国内の世間一般はもちろんのこと同志社内でもあまり知られていない人達がかんりいたように思われる。この人達は日本では資料が残されていないため知られることがなかったわけだが、海外で活躍した地域においては、むしろ彼らこそ同志社の名を広めかつ高める大きな役割を果たしたのではなからうかと思われる。神田重英や谷村かつを取り上げたのは、この第三のタイプの人物の例として、考えられたからである。

ハワイにおいては、一八八五（明治一八）年、第一回官約移民の開始とともに形成されていった日本人社会において、日本人による初期のキリスト教伝道活動は、日本人移民に福音を伝えるのみでなく、相互扶助の団体の結成や、飲酒・博奕などの風紀紊乱を矯正する矯風事業、耕地労働者への英語教育やその子弟のための日本語学校の設立、あるいは日本人病院の設立など、さまざまな働きをなした。また各耕地に派遣された伝道者は、領事館や耕主との交渉・仲裁、銀行の送金など労



神田重英

働者の相談相手であり、あたかも村長のごとき存在でもあり、その影響力は大なるものがあった。

こうした日本人社会の形成の時期、すなわち明治二〇年代に同志社からもハワイに渡りキリスト教の伝道に従事し、さまざまな活躍をした人達がいた。そして彼らを嚆矢とし、その後、数多くの同志社出身の伝道師・牧師達がハワイに赴き、同志社とハワイとのかかわりが浅からぬものとなったのである。

* * *

神田重英夫妻と谷村かつの三人について、その軌跡をくわしく紹介することはここではしないが、ハワイでの神田重英のキリスト教伝道と保険・新聞事業、神田夫妻の教育事業、谷村かつの医療看護など三人のキリスト者の働きは多方面にわたった。とりわけマウイ島ワイルクにあった神田夫妻による女学校「香蘭女塾」は二人のまつたく個人的な

経営によるものであった。ここから多くの知名な二世婦人が育ったといわれているが、同じ同志社出身の奥村多喜衛牧師のホノルル「日本人学校」や曾我部四郎牧師のハワイ島「ホノム義塾」とともに、当時のハワイ日本人子女教育への貢献は計り知れないほど大きく、もつと評価されるべきであろう。

* * *

最近になって、曾我部四郎牧師に関してはハワイ島の医師である中野次郎氏が、辻密太郎牧師については杉井六郎・人文科学研究所

元教授がそれぞれ伝記をまとめられた。しかしハワイやアメリカ本土などで活躍した同志社人についてあまり調べられていないのが現状である。例えば、ハワイ伝道の中心人物・奥村多喜衛牧師についてほとんど研究がなされていない。その他、筆者にとつて興味があがり今後追跡しようと考えている同志社人をあげると、神田や奥村とともにハワイの伝道師として渡航し、後に移民会社代理人や『布哇殖民新聞』を発行しながら早世した江口一民（旧姓奥村慎次郎）。ハワイではこの他、四国今治の出身で移民会社業務代理人として一世を風靡したが、ニューヨークで急死した増田知次郎など。アメリカ本土では、熊本バンドのメンバーで、内村鑑三とともに渡米し、後にシカゴ大学教授となり日米問題解決に努力したが、ニューヨークの近くで亡くなった家永豊吉。また昭和初期に神学部を卒業してアメリカに渡り、オペリン大学で修士号を取得しシカゴに在住、第二次大戦後『シカゴ新報』を創刊、後に『シカゴ日系人史』を著した藤井寮一（本名浅野勝）。さらにブラジルにおいては、大正時代神学部を卒業して、アメリカで勉強した後、渡伯してサンパウロ教会を創

立し、さらに聖州義塾を開設、自ら塾長とな
って在留邦人の子弟に日本語またはポルトガ



香蘭女塾の彰栄館（寄宿舎）

ル語で普通教育を施し、同時に寄宿事業を行
なった小林美登利などである。

* * *

筆者はもとも地理学の専攻で、第二次大
戦後の国内の開拓村や、日本人によるフィリ
ピンのマニラ麻栽培、南アメリカにおける日
本人移住地の土地区画について等の研究を進
めてきたが、同志社に就職してから、同志社
関係者による海外移民に関心を持ちはじめ
た。最初に書いたのが、この『同志社時報』
第五九号（一九七六年）掲載の「明治期・テ
キサスの日本人米作者―西原清東・片山潜・
星名謙一郎をめぐる―」である。これは、
日本人によるテキサスの米作農業のリーダー
であつた元同志社社長の西原清東および同志
社にかかわりの深い星名謙一郎、さらに社会
主義者の片山潜について伝記風にまとめたも
のである。

その後筆者は、同志社大学人文科学研究所
のキリスト教社会問題研究会に参加し、一九
八三年からは現在も行なわれている「海外移
民ならびに海外伝道に関する研究」班で、杉
井六郎先生をはじめ他のメンバーの先生方の
御指導を受けながら移民研究を続けていくこ

とができた。そこで初めて発表したのが「移
民の先駆・星名謙一郎の生涯」（『キリスト教
社会問題研究』三二号、一九八四年）である。

星名謙一郎は、ハワイ・テキサス・ブラジル
など海外各地で明治・大正時代の日本人移民
の草創期に活躍した人物である。彼は同志社
出身者ではないが、彼の妻であるヒサは同志
社女学校の出身であり後に母校に迎えられ、
恩師でもあるデントン先生の世話に生涯を捧
げることになる。また彼の長男の泰は元同志
社大学学長の星名泰である。星名謙一郎がハ
ワイで活躍していたちようど同じ明治二〇年
代、同志社からハワイに渡りキリスト教伝道
に従事して日本人移民社会の中で活躍した人
達について紹介したのが「同志社出身の初期
ハワイ伝道者の足跡」（『キリスト教社会問題
研究』三四号、一九八六年）である。先にあ
げた神田、奥村、江口のほか、奥亀太郎、高
森（城貞太郎）、江上源三、曾我部四郎、佐々
倉代七郎、山崎直についてとりあげた。

筆者は、これらの移民研究において、事実
関係の正確さを期するため、外務省外交史料
館や国立国会図書館などの所蔵資料、ならび
に当時のキリスト教関係者を主とする新聞記事

などに立ち帰って分析・検討することにつとめた。しかし移民研究においてはかかる国内の一次史料のみでは不十分である。そこで一九八六年の三カ月間、海外研修の休暇をとり、アメリカ合衆国における日本人移民に関する資料探索を行なった。とりわけUCLAやハワイ大学で、豊富な一次史料を実際に見る機会を得て、大変有益であった。またこれを機に、これまで日本の移民研究ではほとんどなされてなかった『やまと新聞』など現地新聞記事の利用という新しい研究方法をその後筆者は用いることができるようになった。

* * *

いま筆者自身の研究課題として、ハワイなど海外における日本人キリスト教会の果たす役割が、神田らの活躍した明治時代の日本人社会形成期と、大正・昭和期の排日運動のさかんな時に、ホノルル・マキキ教会の奥村多喜衛牧師を中心に「日米親善運動」をおこした時期、さらに第二次大戦後の日本語を話さない三世・四世の世代、あるいは新しい移住者や企業労働者をも加えた複雑な社会において、どのように変っているのかを追求することを考えている。これに関しては、人文科学

研究所における研究班でハワイに興味をもつ六人のグループにより、筆者を代表者として「ハワイにおける日系人社会とキリスト教会の変遷」というテーマで、サントリー文化財団に対して研究助成の申請を行ない、幸い七月に助成金を受けることが決定した。したがって筆者は当分の間、ハワイの同志社人を中心としたキリスト教活動についての研究を進めることになるだろう。

ところでハワイにおいては、地元の組織的な資料収集活動が現在低迷しているように思われる。したがってハワイのキリスト教伝道にかかわりの深い同志社としては、少なくともキリスト教関係あるいは社会事業関係の分野のみでも資料収集を行なう必要ありと考える。今日、国際交流が叫ばれているが、同志社がUCLAやハワイ大学などと学術協定を結び、学者・研究者の交流をもっとさかんにして、同志社を日本人移民研究もしくはハワイ研究の拠点にすることを筆者は望むものである。

(女子中学・高等学校教諭・社会科)

同志社談叢 第九号

論文

新島襄の大学設立運動(一)……………河野仁昭
明治初期岩手県 of 同志社人に
関する新資料……………高橋光夫

高橋元一郎ノート……………室田保夫
—詩・社会事業・平和そして祈り—

徳富蘆花と「今治英学校」……………竹本千万吉

資料

同志社職員異動表……………

—明治二五〜二七年度—

新島襄に関する文献ノート

(その七)

河野仁昭

—著者・筆者別—

(頒価一、〇〇〇円)

発行・同志社社史資料室

取扱い・同志社収益事業課

電話(〇七五)二五一—三〇三七・八



奇術師百態

十九世紀は奇術ショーの黄金時代で、フランス、イギリス、アメリカの順にその中心は推移したが、もし成功すれば今日のハリウッドの大スター並みの名声と金を手（こゝろ）にすることが出来たのである。だから意外な身分や職業から奇術師となった人が多かった。

奇術で身を減ぼした貴族

たとえばエルネスト・パトリツィオ・ディ・カステイリオーネはイタリアの貴族の家に生まれ、家憲に従って陸軍将校となり一八五九年、オーストリアとの戦争に出征、武運つたなく勝利直前、捕虜になって収容所に入れら

れた。

前川道介

取り調べのオーストリアの役人から職業を尋ねられ、本当の身分を明かせばかえって面倒なことになると判断したため、少年時代からのホビーを思い出して奇術師と答えたところ、収容所長の前へ連れて行かれ、冷汗を流しながら手品を一つ二つ披露すると、これが大受けて、すぐ捕虜慰安のための演芸会にでたり、収容所のある町の人々のために演技したりして、釈放されたときはプロの奇術師となろうという決心が不動のものとなっていた。一家の人々はさぞ複雑な気持ちだったろうが、その第一歩として故郷の町で開いたショーは、名誉の復員軍人である貴族の当主が旅



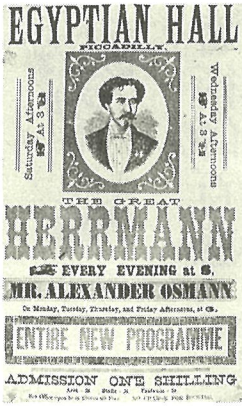
首斬り術

芸人まがいの奇術師にという客の好奇心のおかげで大喝采を受け、勇躍フランス、ブラジル、メキシコ、アメリカ合衆国を巡業した。最初のうちはすべてがうまくいくように思えた。しかし次第に人気がおち、故郷の財産を次々に処分していったが、いつか世界的な名声を手に入れようという夢は醒めず、南米興行に残った全財産を注ぎ込んで乾坤一擲の勝負にでたものの、収支償わずこれも失敗、すべてを失って故郷で淋しく死んだのは気の毒な話である。

大学教授のアルバイト

「バタベスト」の大学で物理学を講じていたヨゼフ・ヴァネックは、一八四九年、ハンガリーに革命騒ぎが起こったとき、その指導者ロヨス・コシュートの同志だったため、彼とともにトルコへ亡命を余儀なくされた。だがたちまちどうやって食べていくかという問題に逢着して、ままよとばかり奇術師になった。

メカニズムに強く、かつ人間通として我々もつ、怖いものほど見たいという奇怪な心理を熟知していた教授は、奇術としてはエジプトの昔からある、人や動物の首を斬つてから元通りにする首斬り術を最高に残酷な演出でやることにした。ダンピラで首をこしごし切り、ふんだんに血を流したうえに、切り取



サーストンの偶像だったアレクサンダー・ハーマン

った蒼白な首を皿にのせて観客席の間を持ちまわったのである。そのつど、失心する婦人がでたので大評判になり、英国に呼ばれ、ヴィクトリア女王の御前でも演じ、トルコで別れた友人コシュートとも無事再会することが出来た。のち祖国へ帰り、また教壇に立つたが、一八九九年亡くなるまで副業として喫茶店と骨董屋を経営していたのも変っている。

偶像を追った男

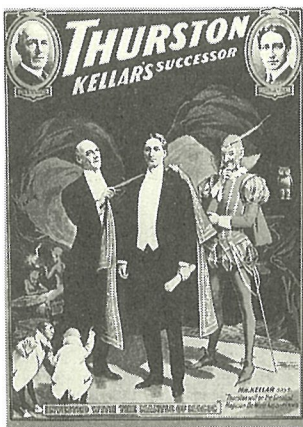
一八六九年、アメリカはオハイオ州に生まれたハワード・サーストンは一九〇八年、ハリ・ケラーから一座を引き継ぎ、一五三五年、六十七歳で亡くなるまでアメリカ最大、ということば世界最大の一座を率いて奇術界に君臨した。

研究家によると彼の「自伝」は大分嘘も入っているらしいが、少年時代は騎手見習いやホテルのボーイ、新聞配達など、さまざまなアルバイトをした。七歳のとき当時アメリカの奇術界の第一人者と仰がれていたアレクサンダー・ハーマンの舞台を

見て深い感銘を受けたが、そのときはまだ奇術師になろうという気はなかった。

だがそのうちホフマン教授の奇術解説書「モダン・マジック」を手に入れ、カード奇術の練習に打ち込むようになった。

やがて伝道師として必要な医学を修めることになり、たまたまニューヨーク行きの列車に乗るべく途中下車したアルバニの町の駅で今夕のハーマンの公演を告知するポスターを見たとき、少年時代の感激が油然と甦って乗換えをやめ、その晩、劇場を訪れ、熱狂と陶酔を新たにしたが、今度は自分で奇術の練習を積んでいただけに人間業とは思えぬ名人



ケラーの後継者となったサーストン

芸に感銘もひとしおだった。

翌朝、ニューヨークへ向うつもりで駅へつくと、何とハーマン夫妻が切符を求める人の列にいてではないか。小踊りしたサーストンはびつたりと夫妻の後に並び、ハーマンが八時二十分発シラキューズ行き切符を求めるのを確認したあと、ニューヨーク行きと言ったつもりが、畏敬する人をすぐ前に見て上気していたせいか、気がつくとしらキューズ行きの切符を求めていたのであった。あつと思つたが、それを一種の天啓と受け取つた彼はハーマン夫妻と同じ列車に乗り、その晩の公演も見て、伝道者、医者となる計画を放棄、プロの奇術師になる決心をしたのだつた。故郷に帰つて父親にこの決心を打ち明けると、何をやっても腰の坐らぬ息子に愛想を尽かしたのか、二十五セント玉をひとつくれ、勝手にしろと言つたという。

その後サーカスに入って生活の資を稼ぎながら客の選んだカードを一組のカードの山からせり上らせるライジング・カードの新技法を開発してから次第に名を売り、自分の一座をもち、オーストラリアから東洋諸国を巡業して大きな成功を収め、ついに当時、ハー

マン亡きあとアメリカの奇術界の長老だったハリー・ケラーの後継者に指名されるという金星を射止めたのだつた。

以後彼はケラー時代には十四の演し物中せいで五回だつた大道具を使う奇術を十八回も見せるようにした。なかでも「カラナツク王女の浮揚」、「インド・ロープ」、「蛾と炎」、「自動車消滅」などは有名である。

サーストンの至言

彼は映画全盛の時勢に抵抗するため働き過ぎて倒れ、一九三六年四月に亡くなるのだが、ブロードウェイでは彼のショーを見たデー・ルー・カーネギーは「友人獲得法」という著書の中で、サーストンが、「世間には私と同程度に奇術の出来る人が何百人もいるはずだ。しかし観客に及ぼす人格的な力にかけては私がピカイデ、ひよつとしたら私のもつ最も不思議な力はこれかも知れない。お客というものが何を望んでいるか、私は知り尽しており、舞台上の一挙手一投足、たとえば眉を吊り上げる表情まで、秒単位で計算し尽している。またほかの奇術師は客にいっぱい食わせて

得々とするが、私はお客こそ日々のパンを与えてくれる有難い存在と考え、最善を尽してその厚意に酬いるように努めている点が違ふと思う」と書いている。要するに奇術はある程度まで上達したあとは、技術より演ずる人の、こころの問題ということで、これは芸道のみならず、人生の営み全般に通じる至言である。

失敗を踏み台にした男

アングロ・サクソン系の人の著わした奇術史でほとんど取り上げられていないフレード・マルヴェリはドイツのシュレジア地方に一九〇三年に生まれ、本名をフリードリッヒ・イエツケルという。親から聖職者になれと命じられ、神学校に入つたが、ラテン語がどうしても嫌で退学、歯科医の助手となり、通勤していた。ある日、駅の売店で「カード奇術入門」という名もない著者の書いた本を手に入れて実験してからはそのとりこになり、診療室でも練習に打ち込み、やがて抜歯の不安に戦く患者に見せて気をまぎらわせるまでになった。そうした患者のひとりからチ

ヤリティー・ショーに出演するように頼まれ、喜び勇んで貸衣裳屋に走り、生まれて初めてフロック・コートとブラック・タイを身につけた。

だが上流社会人のひしめく会場の眩いばかりの雰囲気につきかりのぼせてしまった彼はせりふも満足に喋れず、手足は枷（かせ）をかけられたように重くなり、失敗の連続で冷汗三斗、卒倒寸前までできたが、無情な客はそれを見て爆笑し拍手する始末……。やっと世話人が幕を引いてケリをつけてくれたが、彼はもう完全に打ちのめされていた。そして折悪しくドシャ降りになった雨の中を夢遊病者のように家まで歩いて帰った。

その後びつたりと人前でカードをいじらなくなつたのを見た人は当然彼が諦めたものと思つたが、あにはからんや、ひそかに以前にも増した猛練習を続けていたのである。あの夜、啗（く）つた連中をきつと感心させてやるぞという意地だけでは考えられぬほどの精進ぶりだった。

十五歳のとき祖国ドイツが第一次大戦に破れてワイマル共和国という混乱の時代をかつたに生きてきたわけだが、一九二一年、あ

の破局的なインフレーションに追い討ちをかけられ、歯科医の助手だけでは到底暮していけなくなつたとき、彼は町や村の結婚式にヴァイオリン奏者として雇われ、しまいに楽隊を率いて一日のパンを稼いだ。

また新聞に広告をだしサーカスに職を求めて、「世界劇場」という名前だけ大きい田舎サーカスに雇われ、音楽伴奏をするほか、ポスターはりまで手伝い、芸能界の表裏をたつぷり勉強した。その間もカードの練習を一日も休まなかつたのは言うまでもない。

一座と別れて湯治場で奇術を見せるようになってから、次第に人氣がでて、次々にお座敷がかかるようになった。フレードー・マルヴェリを名乗つたのはこの頃である。ドイツでは我が国と違い、温泉は療養所という觀念のほうが強いが、一面では上流の社交場としての伝統があり、そういった人々の口コミもあつて、南独、スイスの有名湯治場に出演し、ついにイタリア国王一家の私的なパーティーにも呼ばれるようになった。

以後は順調に名声を高め、一九三六年にはドイツでもっとも權威があり、國際的にも高い評価を受けた「マジック・サークル」の会

員となり、一九三七年、この会から最高の名誉である「マジック・サークルの指輪」を贈られ、その翌年も同じ賞を獲得した。

戦後はヨーロッパ諸国はもちろん、ソビエト、南米まで巡業したが、寄席など小さな劇場でやることはめつたになく、大劇場でやるのが普通で、たとえばベルリンの一流コンサート・ホールであるベートーベン・ザールを二十六夜連続して満員札止めにしたのはいまだに語り草となっている。

しかも彼の十八番は人体浮場や美女のノコギリ引きといった大道具を使うイリュージョンではなく、奇想天外なアイディアを抜群の手練で実現して見せるものだった。

ラヴェルのあの名曲「ボレロ」の旋律にのつて空中から火のついたタバコをつぎつぎに取り出す妙技、あるいは何の変哲もないロープに紫外線をあてると、ロープが蛇のように立ちあがり、彼の手の動きにつれてくねくねうねり踊つたあと、またもとのロープに戻り、お客が手にとつて改めてもどこにも仕掛けらしいものが認められないといった奇術が呼び物であつたが、その間に観客と当為即妙の会話を交わしながらカードやハンカチを使う手

練の至芸を見せ、全三時間、ひとりで客を飽かせなかったのである。

マルヴェリを称える人々

やはり「マジック・サークル」の会員だった奇術研究家オトカル・フィッシャーという人がいる。かつてオーストリア帝国の文書局に勤めながら、自宅のサロンで「マジックの夕べ」を開き、ウィーン社交界の人気を集め、カード・マジックでは不世出の名人とたたわれたヨーハン・ネボムク・ホーフツィンザーに私淑した最後の人である。

晩年ホーフツィンザーはプロとして独立したものの、もともとサロン・マジックむきの人で、ひたすら派手なイリュージョン・マジックを見ようとする一般大衆の好みにあわず、厭世病に取り憑かれ、多年書きとめた奇術に関するメモや苦心して収集した小道具類を一切、焼却するように遺言して死んだのだが、フィッシャーは未亡人を説き、そのメモを整理し先師ホーフツィンザーの奇術の全容を伝える著書を三冊後世に残す

功績があった。

このフィッシャーはマルヴェリがウィーンを訪れたとき、その手練と優雅なスタイルこそ先師の後継者と呼ばれるのにふさわしいと確信して先師からの秘伝を親しくマルヴェリに伝えたのである。

「奇術のパガニーニ」とまでいわれたマルヴェリについての賛辞は無数にあるが、アレクサンダー・ベルシュは、「マルヴェリのマジックではトリックを考えだす空想力とそれを失敗せに行なう技術と同様に偉大なのは、いかに苦心してやっているかということを毛先きほども気取られぬようにやることである。これらの特徴があいよつてマルヴェリの舞台に何とも言えない魅力を与える。彼がまじめ



ロープ・トリックを演じるマルヴェリ



ヨーハン・ネボムク
ホーフツィンザー

な顔をしてひとつの奇術をうっかりしくじるか、あるいは誰にでも出来すよといったふりをするときがいちばん面白い。そのときからかわれているのは、いつも我々なのだ。わざと軽率になされた行為が最後の瞬間になつて目くらましだったことが判る。それはその奇術を一段と名人芸的に、より複雑でより不思議なヴァリアント(変形)として行なうためにのみなされていたのだ」と書いている。また現代西ドイツの代表的奇術師アードリオンは、「彼は奇術師がひとたび手にとった道具は地上の法則を脱し、日常の法則に従わず、魔法の雰囲気をもつ特別な物でなければならぬことをよく心得ていた。彼の演技の与えた独特な感銘の基盤は、小道具を客に見せると

きの魅力的な手つきにあった。すなわち彼がボールやタマゴやコップやカードを手にとる様子に誰にも真似出来ぬ魅力があったのである。その奇術が人を啞然とさせて終る前のこの魔術瞬間に魔術は既に起こっていたのである」と書いている。

名優の道業として

変ったところでは「市民ケーン」や「第三の男」などで知られるアメリカの映画監督兼俳優オーソン・ウエルズはホビーとして奇術を何より愛し、自ら屢々演じた。

少年時代、彼の情熱の良き理解者だった父親がバーンシュタイン博士という人物を家に招いて奇術を教えさせたのも恵まれていた。博士は人形劇のセットを使って人形に命を吹き込んだり、あるいは消滅させる方法を教えてくれた。

ある日、博士は少年を縄抜けの天才として知られたハリー・フリーディーニのショーに伴い、ショーが終つてから楽屋にいるフリーディーニに会わせてくれた。少年の奇術に対する情熱に感心した巨匠はその場で赤いハンカチ

を使ってやる簡単だが、なかなか効果のある奇術を教えた。オーソン少年が早速やつてみると、巨匠は「お客の前でやるまで、千回練習しなくちゃいけないよ」と諭した。

二日後、再び楽屋を訪れると、フリーディーニはある紳士から新しい奇術を習っているところだった。そしてオーソンがすくなくならず驚き、またがっかりしたことには、巨匠はその日のステージでいま覚えたばかりの奇術を客の前でやつて見せたのである。

第二次大戦中はテントばりの仮設舞台に立ち奇術ショーで兵士たちを慰問した。二時間のプログラムを組み、シルクハットからウサギを、果物からドル紙幣を引っぱり出し、あのマルレーネ・ディートリヒをはじめ、たくさんハリウッドの女優たちをノコギリ引きにしてやんやの喝采を浴びた。その犠牲になった女優の一人リタ・ヘイワースとは後に結婚して話題になった。

あのフリーディーニに教えられた赤いハンカチの奇術はこのときもまた後も彼のプログラムから削られたことはなかった。一九五一年、ロンドンのチャ

リティー・ショーで見せ、またそのすこしあとでは当時のプリンセス・エリザベスとプリンス・フィリップにも見せた。

私的なパーティーではタマゴの中から貨幣を引き出す奇術を好んでやり、また彼が製作した「カリオストロ伯爵」という映画は奇術に関する専門的知識なしには到底できなかっただろうと言われている。カリオストロは十八世紀に活躍した有名な詐欺師で奇術応用の交霊術や透視術によつて善男善女をたぶらかした人物である。

あるとき、メトロ・ゴールドウィン・メイヤー社長ルイス・B・メイヤーが俳優たちを集めて大パーティーを催した。名だたる連中ばかりなので、ダニー・ケイが歌い、ジャッ



奇術師オーソン・ウエルズとマルレーネ・ディートリヒ

ク・ベニイが漫談をやる……という具合に余興には事欠かなかった。オーソン・ウェルズはスモーキングの中にウサギを匿し、好機をねらっていたが、チャンスが来る前に夜が明けてお開きになってしまった。それどころかそのウサギがおもらしをしたためにクリーニング代を損してしまったのである。

焼死したと見せかけて難を逃がれる

一八五九年、サンフランシスコに生まれたカール・ハーツはロシア人を父、ポーランド人を母としていた。小学校時代から奇術師になる夢を追い、学校を出てから奉公にだされた店で練習を続けて、ぐびになり、次々に店を変った。やがて念願の一座を組んで南カリフォルニアを巡業したが大赤字となり、すぐご帰郷した彼を迎えた父は激怒して奇術の道具をすべて焼きはらってしまった。

それでもこりず、アルバイトの金で道具を買い整えるとカンサス市で公演したのが予想外にあたり、サーカス団と組んで巡業した後、英国へ渡った。呼び物はド・コルタというフランスの奇術師が開発した「美人消失」と「消

える鳥籠」だった。以後順調でヨーロッパ、オーストラリア、南米、日本を含むアジア、ロシアなど世界を股にかける大奇術師となった。

東洋公演のとき、シンガポールの官庁につとめるマレー人から、北ボルネオ公演の話があった。そのダヤク族の王様からは非白人魔術師を連れて来てほしいと頼まれた、この王様は回教に帰依し、先祖伝来の首狩りの風習も禁じているから安心だと言うので、冒険に憧れるハーツは助手を勤める妻のエミリー・エ・ダルトンとともにスラバヤからジャワに船でいき、セサヤから王様の派遣した歓迎団のロバの背に揺られて進み、最後はカヌーに



カール・ハーツ

乗ってやつと目的地に着き、奇術を見せた。住民たちは一種異様な唸り声を発しつつけて熱狂し深い感銘を受けたようだった。

やがて仲介したマレー人が来て、王様はいたく感心された。ついではお姫さまが貴殿とは非結婚したいと希望されているが、と言った。ハーツが既に妻がいる身であると言えど、お姫さまは先刻それを御承知である、しかし回教の教えでは複数の妻をもつことが許されるし、自分はハーツ夫人と充分仲良くやっていく自信があると断言しておられる、という強談判に、やむなく結婚を承諾したハーツは「フエニックス」というイリュージョン奇術で女難を逃れることを思いつき、大鍋の下にどんな火をたかせ、その中に入ってしまった灰になってしまったのである！

お姫さまは茫然自失、激しく泣いた。ハーツの妻は悲しそうにあなたのために自分のお宗旨を捨てた天罰でこうなったのだしうと言いい、以後は未亡人の役を演じ、ハーツがこっそり忍び込んだ籠を後世大事に守って無事この国を去ることが出来たのだった。

(大学名譽教授)

考古学と私

——大和での発掘調査を通して——

前園 実知雄

大学院の受験に失敗し、なかば茫然自失の状態で、しかし再挑戦を期しつつ当時平安博物館に勤務されていた白石太一郎氏（現国立歴史民俗博物館教授）のもとで平安京の発掘に参加していたある日、恩師である森浩一先生からの呼び出しがあった。話の内容は、奈良県にある橿原考古研究所で長期にわたる発掘予定があり、同時に今まで常勤職員のいなかった研究所を充実する計画があるのでしばらく行つて勉強をしてみないか、ということであった。次回の受験までの一年間実地で勉強できるということで、所長の末永雅雄先生が当時勤務されていた関西大学の考古学研究室を訪問し、橿原勤務が決まった。ほゞ同時に

白石太一郎、藤井利章（現神戸女子大学助教授）、河上邦彦氏も参加され、すでに確固たる歴史と伝統のあった橿原考古学研究所でのさまざまな常勤職員による調査研究がスタートした。一九六九年の夏であった。ほんの一時の腰かけのつもりで入った研究所で、もう二十年もの歳月を送ってしまったことになる。何もまとまった仕事ができないという後めたさと、いろんなことがあったなという気持が交錯しているところが正直な心境である。一年目の秋の終り、七〇年安保にむけての闘争が激化していた大学へ帰ろうか、このまま続けようかと悩んでいた頃、先輩でもある白石さんから本当に勉強するつもりであれ

ば、今はここにいろのほうがいいのではないかと。しかし将来人一倍努力する必要があるけれど。というサゼクションを受け研究所に残ることにした。そのことを決して忘れることはなかったが、いまま実現にはほど遠いといわざるをえない。

私は卒業論文には古墳時代の終末に関する問題をテーマに選んだ。あの巨大な古墳を全国各地に築いた時代がどのように終末をむかえたのか、それは私にとっては古墳時代のはじまりよりも興味深い問題であった。政治的要因、思想の変化などをその理由にあげたが、今もその問題についての関心は持続している。

橿原考古学研究所は名前の通り研究機関であるが、同時に奈良県の行政機構の一部でもある。今私達が当面している仕事の多くは、開発にともなう遺跡の事前発掘調査である。限られた期間、限られた調査費でいかに学術的価値の高い調査をおこなえるかという間に日常的に直面しているわけである。そういうことであるから自分の関心とかけはなれた調査を担当せざるを得ない場合もある。私は仕事は楽しく、気持にゆとりをもつてやるべき

だという主義なので、基本的なところでまず不満を解消してことにあたるよう努力する。自分にあまり関心がない問題でも視点をかえばいくらかでも興味はわいてくるわけである。

今まで数多くの遺跡の調査をおこなってきたが、自分で自ら積極的に望んではじめた調査はほとんどない。学問に対する積極性が欠けているからだとの指摘をうけるかも知れないが、私にとつては調査した遺跡は、全てかけがえのないつばいの歴史を取めたパンドラの箱のようなものだ。自らの熱い思いを込めて発掘調査にとりかかり、自らの考えを証明することに心血を注ぐため、客観的事実を見失なってしまう例が見受けられるが、「事実は小説より奇なり」の諺通り、事実はなまはんなか思考をはるかに越えてしまうものである。私はそれぞれの遺跡のもつ真実をまず遺跡に語らせることからとりかからなければなら

ないと考えている。遺跡、遺物は全て過去に生きた人々の所産である。発掘調査に細心の注意を払い、心をこめてかかれれば、それらはひとりでに語りかけてくれる。私達は彼らの語りかけを素直に聞く謙虚さを持つことが大切である。その上でそれぞれの観点で歴史を構築してゆくべきである。決して性急であつてはならない。

先にものべたように、私にとつて手がけた遺跡は私の問いかけに対して多くを語ってくれる。何の変哲もない小さな遺跡が、時には思つてもみなかったような重大な歴史を教えてくれることもある。そして発掘調査の作業は、野外の現地に立つて地元の人達や、作業員など多くの人達の協力によつてはじめて成り立つ仕事である。それぞれの調査にかかわった土地、かかわった人達との想い出もある。考古学は歴史学のなかでもより人間とのかかわりの深い学問といわれるゆえんである。

太安萬侶墓誌

ここで今までに私のたずさわった調査のなかでいくつかの例をあげて、彼らの語りかけと私の思いを紹介してみたい。

まず、太安萬侶墓の調査。古事記の編者としてあまりにも著名な太安萬侶の墓誌が、奈良市の東の山を越えたところにある茶畑の一角から茶の木の新植の作業中にあらわれたのは、一九七九年の一月のことであつた。偶然の発見ではあつたが、発見者の慎重な処置が効を奏し、墓の構造も墓誌の出土状況の調査もできるということになり、急拠調査担当を命じられた。当時法隆寺境内の調査をおこなつていた私は、詳しい内容を知らされる前の突然の通告に上司に反論したが、その内容を知らされ体中に戦慄が走るのを憶えたことが、今も記憶の中に強くきざまれている。

調査開始当日から終了までの二カ月間、マスコミのフイーバーぶりの中での仕事は、寒中での作業とともに心身に与えた苦痛は大きかったが、その緊張感を決してマイナスではなかった。安萬侶の墓誌発見をはじめて聞いた時の衝撃は、翌朝現地に立つた時から急速に消えてゆき、冷静な気持でことにあたることができたが、作業が進むにつれて、いろいろな事実が明らかになるにつれて、歴史の不思議さというか、偶然とは思えないいくつかのことに感動したことを思い出す。例えばあの



太安萬侶墓の木炭櫛と空洞

広い大和高原の中で、墳丘も全く残っていない墓が発見されること自体きわめてまれなことであるが、現地に立つてまず驚いたのは、この安萬侶墓の数十センチ西側までは重機による掘削がおこなわれていたことである。ちょうど墳墓の場所が土地の境界線上にあったことから難をまぬがれ、この土地に新たに重

機を入れるのにも進入路がないこと、斜面が急であることなどからやむなく人手による移植をはじめたらしい。

この木炭に覆われた墓が話題になったあと、現地で作業する私達のところへ、「こんな炭だったら近くでも出ました」という話を伝えてくれる人がいて、早速この墓から百メートルと離れていない改植を終えた茶畑の斜面へむかってみると、そこには細かく砕けた木炭片が散乱していた。もし隣りの畑同様に機械で作業をしていたなら、墓の調査はおろか墓誌発見もおぼつかなかったであろうと思うと、偶然とは思えない因縁のようなものを感じずにはいられなかった。

その後周辺の畑や山の斜面についても詳しい分布調査や聞き込み調査をおこなった結果、このあたり一帯が奈良時代の墳墓地帯であることが明らかになった。

墓誌発見の直接のきっかけは、畑の斜面から木炭で囲まれた空洞がみつかったことで、その中に火葬骨と銅製の墓誌が安置されていた。空洞は当初からのものではなく、木製の櫃が腐朽したあと周囲が硬くつきかためられていたこともあってそのまま残ったものであ

る。これももし当初から発掘調査の手順通り上から順番に下にむかつて掘っていったなら、おそらく木炭層にたどりついた頃、空洞は上からの圧力で押しつぶされ消滅し、墓誌も完全な形ではとり出すことはできなかったであろう。竹西英夫さんというたいへん慎重な方が注意深く掘られ、適切な処置をされたことよって、この大発見は目の目を見ることになったが、それは幸いにも発掘調査以上の効果をあげることにもなった。

この墓誌の発見によって多くの学問的な成果はあがったが、なかでも奈良時代の葬地の問題にまで研究が進展し、現在では平城京と公葬地の関係が明確な形で指摘できるまでになった。古墳の終末に興味を抱いていた私にとって、偶然与えられたチャンスではあったが、自分の研究テーマを前進される意義深い調査であった。先日機会があつて現地を訪ね、竹西さんとも親しくお話をする時間をもつたが、遺跡は美しく整備され今も多くの人が訪ねて来られる様子を見て感慨を新たにした。ほんの小さなことから大きな歴史の動きが見えてくる場合もある。一九七八年の夏、大和郡山市額田部にある額安寺旧境内の一角で

小さなトレンチ調査を実施した時、鎌倉時代に掘られた寺を囲む環壕の一部にあたった。その中からは奈良時代から鎌倉時代にかけての瓦や土器が多く出土したが、その中に一片、五センチメートル四方の軒平瓦の断片が含まれていた。手彫りの杏葉唐草文軒平瓦という形式で、現在まで同種のものは再建される前の法隆寺、いわゆる若草伽藍でしか確認されていない瓦であった。

額安寺は、奈良の大安寺の流記資財帳によれば、聖徳太子が建立した熊凝精舎を舒明天皇が太子の遺志をついで百濟寺としたことにはじまり、都の変遷とともに飛鳥では高市大寺、平城京では大安寺となつて発展したことが知られている。当初のまゝの地に残つた額安寺はその後も法燈を守っていたが、寺に残る奈良時代の額安寺班田図や、発掘調査の結果からみて、平城京の大安寺とやはり深い関係にあつたことはまちがひなかるう。

奈良時代の留学僧として帰朝した道慈によって再興されたという伝えを裏付けられるかのように、境内から出土する瓦は大安寺式が多数を占めるが、創建に関する資料は知られていなかった。再建法隆寺に用いられた忍冬唐草

文の軒平瓦の使用や、飛鳥時代に創建される後も法隆寺と近い関係にあつたことまでは予測されていたが、この一片の瓦片によって創建法隆寺と額安寺、つまり聖徳太子と熊凝精舎のつながりが確実に近いものであることを私達に教えてくれた。

発掘調査の面白さ、また難しさは、先ほどのべたように遺跡、遺物に対して謙虚な立場にたつて語らせなければならぬことはいうまでもないが、その糸口はこちらから与えなければならぬところにある。もしこの一片の瓦を見逃したり、その知識を持ち合わせてなければ、この事実は永遠に日の目を見ないことになる。学問をやつてゆく上で重要なことは、客観的なものの見方と、それを構築してゆく主観との間にすぐれたバランス感覚を持つことであろうと私は考えているが、考古学、なかでも発掘調査はそれを強く要求する学問である。

いままで二十年余りの間に関わつてきた調査は、それぞれに重要な意義を持つている。何も考える以前にもうひとり歩きをはじめたような藤ノ木古墳や、再建・非再建論争に決着のついた法隆寺の調査、壬申の乱の旗上げ

の地であろう吉野の宮瀧遺跡など、それ自体古代史の中でさけて通ることのできない歴史の検舞台の一コマに登場する遺跡であるが、私はむしろあまり派手やかでないけれど、しっかりと歴史の流れの中で重要な位置をしめ、こちらの問いかけに淡々と語りかけてくれる遺跡のほうにより愛着をもっている。

生駒市の竹林寺の境内にある奈良時代の高僧行基の墓の近くで発掘した鎌倉時代の律僧忍性の墓、桜井市大神神社の境内にある神宮寺、大神寺とその前身遺構など、それらはまさに人間の歴史をドラマチックに語つてくれる。機会があればこれらの遺跡についてもべてみたいと思つてゐる。

(一九六九(昭和四十四)年 大学文学部文化学科卒業・
橿原考古学研究所主任研究員)